

初冬直まきで負担軽減
JAグリーン
サービス花巻 水稲生産者講習会



実証試験圃場で開かれた初冬直まき栽培の講習会

「初冬直まき栽培」の生産者向け講習会は8日、花巻市鍋倉の実証試験圃場で開かれた。県内外から約40人が参加し、持続可能な農業の在り方や将来像、課題に

ついて認識を共有した。

生産者の高齢化や担い手不足といった課題の解消に向け、苗作りを行わず、圃場に直接播種する直播栽培が注目されている。中でも10～12月の農閑期に播種して土中で越冬させ、翌春に発芽、苗立ちさせる初冬直まきは、春の作業負担を分散、軽減させる成果が見込まれ、果樹や野菜も生産す

る農家にとっては時間の有効利用につながる。

広さ14㍍の実証試験圃場では、2022年の初冬からひとめぼれを直播栽培。反収は23年産の5・4俵から24年産は7・3俵まで増加したが、さらに向上させようと、25年産は播種や元肥の量を増やすなどの対策を講じており、さらに管内の平均的な広さに近い約50㍍の圃場を新たに加えた。

講習会では、同大農学部の下野裕之教授が県内外の直播栽培の事例を交えながら春の土壌鎮圧や適切な水管理、除草管理などの技術ポイントを説明。参加者は実際の生育状況を確認するとともに、播種量が慣行の4倍ほど必要なことや圃場の均平、連作などの課題にも理解を深めた。

下野教授は「初冬直まきへの関心は高まっている。安定的に生産できるようになり、一つの技術として定着してほしい」と語った。

岩手日日新聞 令和7年7月13日(日)12面

※この記事は岩手日日新聞社の許諾を得て転載しています。

※無断転載・複写を禁じます